

昨年夏第5波のデルタと違うのは、これだけ感染拡大すると医療従事者自身が陽性になったり、濃厚接触者になって、病棟をフル稼働できなくなっているところが増えています。絶対数が多いと、いくらオミクロン株の重症化が少ないといっても病床や外来が開けられず、すべての医療機能がひっ迫してきます。

神奈川県の病床数は、人口あたり、全国1少ないのです。(療養病床をいれても約800床)一番多い県(高知県約2,400床)の三分の一です。

それを神奈川モデル(役割分担)の中で何とかやりくりしてきたので、患者のボリュームという面からも、これまで陽性患者を診ない代わりに他の医療で頑張ってきた病院でも陽性患者の発生に直面せざるを得なくなります。神奈川県の医療が置かれた厳しさがこれまでとは別のもので考えた方がいいと思います。

猛暑で、熱中症や心筋梗塞、脳卒中など、他の疾病で重篤な患者も大変多い時期です。病棟閉鎖のためコロナだけでなく、県民の命を守る地域医療をどうやって維持できるかという瀬戸際に立っている病院も少なくありません。

昨年は、8月10日に会員病院の皆さんにお願いして、一般医療を延期できるものは延期して多くの病院にコロナの病床を増やしてもらいました。

これは、「災害特別フェーズ」です。フェーズの最終段階としては残っています。

しかし、今回は、比較的重症化することが少ないといっても、社会的な行動制限をしないという政府の方針の下で、患者の増加が半端ない状況です。病棟の閉鎖なども含めて一般医療で延期できるものを、すでにやらざるを得なくなっている病院も多いです。そのような中で、コロナを特別扱いするのではなく、重篤な、脳・心臓疾患や外傷と同列で、命を守るためにどうするか、病院としても、また、患者さんの一人ひとりで「最善の判断」を強いられる状況です。

今、自分の病院でできることを最大限努力するしかない。それを会員病院向けのメッセージに込めさせていただきました。